

10

process in
architecture exhibition

—— これまでの展覧会を振り返りながら、公募で募られた出展者の一世代上の建築家と建築史家により、U-35（以下、本展）を通じたこれからの建築展のあり方と、U-35の存在を考察する。



13年前、U-30として開催を始めた本展は、世界の第一線で活躍する巨匠建築家と、出展者の一世代上の建築家と議論を交わし、あらたな建築の価値を批評し共有するために召集された。巨匠建築家には伊東豊雄。そして一世代上の建築家として、全国で活動され、影響力を持ちはじめていた建築家・史家である、東より、北海道の五十嵐淳、東北の五十嵐太郎、関東の藤本壮介、関西の平沼孝啓、そして中国地方の三分一博志、九州地方の塩塚隆生。中部と四国を除いた、日本の6地域から集まった。その後、三分一、塩塚など1960年代生まれの建築家から、開催を重ねるごとに1970年代生まれの建築家・史家を中心となる。2013年には、8人の建築家（五十嵐淳、石上純也、谷尻誠、平田晃久、平沼孝啓、藤本壮介、芦澤竜一、吉村靖孝）と2人の建築史家（五十嵐太郎、倉方俊輔）によるメンバーにより開催を重ねてきた。そもそもこの展覧会を起案した平沼が「一世代上」と称した意図は、出展の約10年後に過去の出展者の年齢が一世代上がり、世代下の出展者の新時代を考察するような仕組みとなるよう当初に試みたのだが、この10名が集まった4年目の開催の時期に、藤本が「この建築展は、我らの世代で見守り続け、我らの世代で建築のあり方を変える」という発言から、本展を見守り続けるメンバーが位置づけられていった。そして同時期に、五十嵐太郎の発案で「建築家の登竜門となるような公募型の展覧会」を目指すようになる。

ここで振り返ると、開催初年度に出展した若手建築家との出会いは開催前年度の2009年。長きにわたり大学で教鞭を執る建築家たちによる候補者の情報を得て、独立を果たしたばかりであった全国の若手建築家のアトリエ、もしくは自宅に向向き、27組の中から大西麻貴や増田大坪、米澤隆など、出展者7組を選出した。その翌年の選出では前年の出展者の約半数を指名で残しつつ、自薦による公募を開始し、また他薦による出展候補者の選考も併用した。はじめて開始した公募による選考は、オーガナイザーを務める平沼が当番し、応募少数であったことから、書類審査による一次選考と、面接による二次選考による二段階審査方式で行った。海外からの応募もあったことから2011年の出展を果たした、デンマーク在住の応募者、加藤+ヴィクトリアの面接は、平沼の欧州出張中にフィンランドで実施された。また他薦では、塚本由晴による推薦を得て出展した金野千恵や、西沢大良による海法圭等がいる。つまり1年目は完全指名、2年目の2011年からは、前年度出展者からの指名と公募による自薦、プロフェッサー・アーキテクトによる他薦を併用していた。そして開催5年目の2014年。完全公募による審査をはじめた年の初代・審査委員長を務めた石上純也が、自らの年齢に近づけ対等な議論が交わされるようにと、展覧会の主題であったU-30を、U-35とすることにより出展者の年齢を5歳上げた時期であり、それから今年開催で9年が経つ。また、

この主題の変更に合わせてもう一つ議論されていたアワードの設定（GOLD MEDAL）は、出展者の年齢が 35 歳以下となった翌年の開催である 2015 年。つまり公募開催第 2 回目の審査委員長を務めた藤本が、はじめての GOLD MEDAL 授与選出にあたり、「受賞該当者なし」とした。しかしこれが大きく景気付けられ、翌年には伊東豊雄自らが選出することによる「伊東賞」が、隔年で設定するアワードとして追加され、それぞれの副賞に翌年の出展シード権を与えられるようになる。振り返れば、タイトルを変えてしまうほどの年齢設定も含め、プログラムが徐々にコンポジットし変化し続けているのが、本展のあり方のようだ。2019 年 10 年目の開催を迎え、基盤をつくり準備を整えた本展があらたな 10 年を目指そうとした 1 年目の 2020 年。コロナ禍の大きな試練が待ち構えたが、一度も中止や延期をすることなくこの情勢を乗り越え、本展は今回、13 度の開催を迎えた。

本年より永山祐子を加え、出展者の一世代上の建築家・史家たちが時代と共に位置づけてきたシンポジウムのメンバー 10 名が一同に揃ったシンポジウム開催後に場を設け、今後の U-35 のプログラムから存在のあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、2017 年より開催している。2021 年審査委員長を務めた吉村靖孝、2022 年審査委員長を務めた芦澤竜一、そして 2023 年の審査委員長を務めることになった平沼孝啓を中心に、第 6 回目の「10 会議」を開催した。



—— 皆様お疲れさまでございます。本展が継続するためのエンジンのような、恒例の「10 会議」をはじめさせていただきます。この会議は、出展者の一世代上の建築家・史家たちが一同に揃うシンポジウム開催後に場を設け、今後の U-35 のプログラムの検討と存在のあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、2017 年より開催しております。今年も審査委員長を務めていただいた芦澤先生と 2023 年の審査委員長を務めていただく平沼先生を中心に、第 6 回目の「10 会議」を開催いたします。開催当時より本展のオーガナイザーを務めてくださる平沼先生には、本日も進行の補足応答をどうぞよろしくお願いたします。さて、あらためまして長時間にわたり、本日のシンポジウムも大変お疲れさまでございました。また 2020 年から続くこの情勢の中でも、本展は一度もバトンを落とさず幸運にも開催を継ぐことができました。私たちは高校卒業の頃から続くマスク着用と自粛を求められる青春時代を過ぎてきましたが、本展での先生方の取り組みを通じて、適切に挑めば諦めなくて良いということを学びました。この情勢の 3 年間、継続できたことに深く感謝申し上げます。13 年目の U-35 2022 記念シンポジウムをただ今、終了させていただきました。まずは出展者の選出から大変悩まれ、先ほど GOLD MEDAL を授与いただきました芦澤先生より、今年の出展者を振り返り、選出時から GOLD MEDAL の選考に至る思考の経過と印象をお聞かせください。また本年は来週の伊東賞受賞者ともに、来年出展へのシード権も与えられます。2023 年の審査委員長を務めていただく平沼先生にも感想をお聞かせください。

芦澤：本当にお疲れさまでした。今年の出展者たちは特に、自分なりの建築のビジョンというものがあるので選出の時点から非常に悩みました。最終の評価としては、「新しい建築の可能性」を展覧会で示してくれている人に GOLD MEDAL をあげたいと思い、佐々木さんを挙げました。

平沼：本当にそれぞれの方にオリジナリティが存在し、比較評価では位置づけられない難しい審議だったので、最終の選出に迷われましたよね。

芦澤：そうなのです。自戒を込めて本当はゴールド 1 作ではなく、シルバー 3 作だったらいいのになぁ、と逃避しながら半分本気で思っていました。

倉方：その経緯を感じるからこそ、涙するほど喜んでくれました！

全員：アハハ。

五十嵐淳：シルバーだったら泣かなかっただろうね（笑）。

芦澤：本当に悩みました。ロシア館の佐藤さん+サーシャも建築のクオリティはすごく高かったですし、山田さんの建築のビジョンや、新しい積層という工法を愚直にトライしようとしている姿勢に魅力を感じました。最終は、佐藤さんたちと甲斐さん、佐々木さんの3者で迷ったのですが、佐藤さんたちは僕が選ばなくても他で賞を与えられるだろうと思いました。甲斐さんもそういう意味では今後、評価されてくるだろうし、佐々木さんへ GOLD MEDAL を与える人は、僕しかいないでしょう。そんな評価軸を議論の時間で読み取りました。

全員：アハハ（笑）。

芦澤：今年は来週の伊東賞もありますしね（笑）。議論にもありましたが、佐藤さんたちの「つくろう」という言葉。ロシア館以外の新しいプロジェクトについて、この「つくろう」ということが果たして彼らのオリジナリティの言語になっているのかなということが疑問に感じ、腑に落ちなかった。この言語からつくっているものに対して更に加速させるような可能性をあんまり感じられなかったことから、ゴールドは出さなくても良いと判断していきました。一方で甲斐さんは、根源的な建築について悩みながら、ものとしてはしっかりとできていた。「そのそれらしさ」という言葉で表現していましたが、彼が提言していることというのは「何か新しい建築を示唆するものではないか」と思うようになりました。でも僕の判断では結局「そのそれらしさ」という概念を、最終的にもので示すことができていない。要は、与え創られる形というものが結局何だったのかということが言及されていなかったの、ゴールドではないように思いました。そしてそれほどのマニフェストを掲げていない佐々木さんが残った。

全員：わはは（笑）。

平沼：いや、そろそろ出展者はエコネイティブな世代として、冒頭で挙げられた「展示で示された評価軸」としての選出に行き着いたという経緯ですね。

芦澤：はい、そうです。評価したのは展示に対するスタンス。模型を梱包してきて開ければそのまま展示空間として構築していく。その姿勢が非常に建築的だなと思いました。また梱包している材料や緩衝材も全て収納ができているという箇所も評価しました。色々なプロジェクトの中で建築の

意味や意義、建築が扱う範囲を模索して、彼はまだそれはスタディーだと言っていましたが、U-35 展覧会としては、このように新たなものに挑戦していく姿勢を評価したいなと僕は思っていたので、彼を GOLD MEDAL に決めました。

平沼：そうですね、僕たちどの事務所でも模型の保管や展覧会時の移設には悩みを抱えているものです。芦澤さんが仰るとおり、その着地点を見据えながらの展示と、必然的に分解組立ができる点も評価できますし、何より彼らがこの仕組みを設計したことと、その成果展示を「ひとつのプロジェクト」として建築と展示を並列して示された挑戦に僕も共感させられました。

——— 芦澤先生 1 年間、審査委員長のお役目を果たしていただき深く感謝を申し上げます。そして昨年の審査委員長を務められた吉村先生。この前後の 3 年間、主体となりシンポジウムの発表形式に修正を加えてくださいました。このプログラム修正の効果を振り返っていかがでしたでしょうか。

吉村：この建築の展覧会は、とてもフェアだないつも思うのです。選出の時から展示場所を決めることもそうだけど、シンポジウムの壇上では、見ている人に遠慮して言い方を控えるということもなく、ただ、建築家同士が居酒屋で話しているかのように皆さんが話します。聴講者の方たちにとっても、これがとてもいいと思うんですよ。一緒に会場内が考えている空気感を感じます。またプログラムの修正は、凄く良かったと思います。全体の時間の配分もすごく適切だと思いました、長くもなく短くもない適正な時間にできたからこそ議論も深まったと思います。



倉方：確かにそうですね。時間のリズムも会場との一体感も感じました。

——— ありがとうございます。そして本展のアニキ分的な存在、五十嵐淳先生、太郎先生、本年の開催はどのような感想をお持ちでしょうか。

五十嵐淳：例年通りでしたかね。

藤本：なにになに？そんな冷たいこと言わないでくださいよ！（笑）

全体：ガハハ～（笑）。

五十嵐淳：藤本はこういうのがいいと思っているだろうけど、僕は、あなたたちのシンポジウムの議論は理解できません。

平田：最初、凄く辛口な挨拶から始まって、コメントを求められた時は、良いことだけ発言してたじゃない（笑）。

五十嵐淳：（笑） ええ？僕、辛口で何か言ってたかな。

永山：「展示を見てたら眠くなっちゃったよ～」って（笑）。

平沼：アハハ（笑）ねえ、淳さん、誰を推していたんですか。

五十嵐淳：いやぁ、（笑）。僕は甲斐さんがいいなと思っていたんだけどね。でもいろんな共同幻想が世の中に存在するわけで、藤本平田にはマニアックな共同幻想があるわけなんだよね。

藤本：この本に、「そうじゃない」と去年の対談誌面に書いてあるじゃないですか！（笑）

五十嵐淳：こんな音楽が好きだという主張。例えばビートルズみたいに、世界中の人たちが好きだというアーティストもいれば、少数しかファンがいないアーティストだったりするわけで、どちらが正しいということではない。だからあなたたちは何が言いたいんだろうと。可能性を伸ばす

ためなのかもしれないというのはわかるのだけれど。

藤本：僕らは別に誰が一番偉いと言いたいわけじゃなくて、それぞれ皆さんの中にある可能性を言葉で掘り出したいんですよ。

平田：（笑）僕たちは建設的な話をするために集まっている訳でしょ。だから話をするときの足場を作らないといけないと、仮設しようとしていた訳ですよ。

五十嵐淳：もちろん話を掘り出したいという意図はわかるんだけどさ。自分たちの足場に寄せすぎなんだよ。いろんな足場があっていいわけじゃん！

藤本：そう、僕らは僕らの足場を建てるんだけど、淳さんにも建ててほしいのよ。

倉方：一緒に建てようよ！（笑）

藤本：冷たい態度をとられると、僕らも寂しくなっちゃうじゃない（笑）。ただ足場を平田がつくってくれたのに対して、違う仮説をつくりたいければ、その足場に載らなくても好き勝手に建てていけばいいじゃん！



五十嵐淳：そうだけどさ、建て方にもいろいろあるから難しいなあ（笑）。

藤本：そこをみんなで建て散らかしていけばいいと思うんですよ。結論として審査委員長がどの足場の仮説で議論を進めて掘りあてるのか、選ばばいいだけの話だからさ。

五十嵐淳：だけどさ。そのことで、佐々木さんのような雑な仕事で展示してくる人を選んじゃうじゃない。結構、このゴールドは影響力あると思うよ。本当ならもっとそこはバランス良く、強く彼らに伝えていかないといけないんじゃない？

藤本：そこは審査委員長も出展者を信頼していいんですよ。雑にはつくっているけれど、佐々木は大丈夫、やれる人です。むしろクライアントの事を考えて、器用にまとめちゃっているな、という印象の方が不安な点だった。

平沼：淳さんの建築を想う気持ちからの、精度や姿勢を汲み取った仮説的足場の議論を来年、期待していますね！来年当番するだけに緊張してきました（笑）。

一同：わはは（笑）。

五十嵐太郎：新しい構法や材料をテーマにする展示もあったり、ほとんどが原寸の空間を体験できる展示だったりして、展覧会全体として素晴らしいし、大変良かったと思います。また先ほどまでのシンポジウムも、後半の議論の時間がいつもより長くとることができ、キャッチボールが続いて、聞いている人も僕たちも満足したんじゃないでしょうか。良い会になってきましたね。

——— ありがとうございます。それでは本年に修正しましたプログラムのまま、もう1年、このまま試してみることにさせてください。ここで本年よりご参加いただくことになりました永山先生、本展も通じてこのU-35の展覧会とシンポジウムを「新鮮な目」で見させていただいて、どのような感想をお持ちでしょうか。

永山：凄く面白かったです。やっぱり出展者の方たちは、議論で言葉を投げ掛けられるから、何か返そうとする。そのキャッチボールが面白いんだなと思いました。別に投げ掛けた言葉そのものに強く意味があるというよりは、キャッチボールを生む場が大切なんだと知りました。私は初めてで

したので冷静なテンションを見ていたのだけれど、彼らも一生懸命に、あることないこと、何かわからないけれど返してくる、それが面白くて（笑）。

平沼：名言も残してくださいましたよね。言葉は乗り物だと。さすがです。

倉方：我々の伏線を全部回収されましたね。

永山：いやあ（笑）。居酒屋に集まるとこういう議論になることもありますが、壇上では私たちのような上世代と、加えて会場にいる来賓や聴講者、そして学生などに世代を超えて投げ掛け、いやいや違うよーと言い合えるのは、良い場だなと思ったし、なかなか私はあんな風に投げかけられないから面白いなと思って見ていました。議論を生むことがこの場の特徴。それに対して反応もある。だからもう少し投げかければ良かったなという初回の反省もあります。

藤本：言葉は乗り物だと、会場全体にすごく響きましたね。

平沼：乗り捨てて、最後に残っているものが建築だという名言が残りました。

永山：だけど一方で、言葉とセットじゃないと残らないんですよね、私の父が研究者なので、絶対に言葉にしると言われ続けてきました。途中までは乗り物であり道具だけれど、最後にもう一度言葉に



しろというのはその通り。だから最後、発言させてくれと言った森さんの言葉は真実だと思います。例えば青木さんがプロジェクトごとに、いつも最後に文章書かれる際、担当者は一言も聞いたことがない。でもそれが真実なのだとも思うようになりました。やっぱり、最後にできた時に、もう一度俯瞰して見て残っていた言葉は、本当はこうだったんだと思った言葉を共に歴史に定着させていく。その過程が凄く面白い。いろんな議論というプロセス。グチャグチャとなっている部分がこの舞台に出ていること自体、本当に貴重だし面白いなと思いました。でも一つだけ文句を言いたかったのですが、甲斐さんはとてもいいのですが、2017年の卒業設計の時の説明のままだった。そんな昔のまま説明しちゃだめだよと思いましたし、その様子を見たときに彼はあの頃のまままで止まっているのかなと。それはちょっと悶々としすぎじゃないかな。ここでは彼らの将来を見せてほしいのです。



U-35 2022シンポジウム会場の様子

五十嵐太郎：なるほどなあ。僕もレモン画翠の学生設計優秀作品展で、同じ金田研究室の系統が近いプロジェクトを見た記憶が蘇りました。

永山：1番でしたね。だからこそ、今回ちゃんと説明しなきゃいけなかった。

倉方：同じことの延長線で取り組んでいるのなら、その先を説明しないと次にはいけないということですね。

五十嵐淳：そうね。先日、新潟に行った時に、平田の処女作を見てきたの。あれが一番いいんじゃないかなと思った。だから変わることもいいかもしれないけれど、それを貫くことでもいいわけだけどね。

藤本：貫いているのなら、その貫いている今を見たいよね。

平田：そうそう。貫くということは変わっているということだからね。

五十嵐淳：それはそうだね。永山さんには貫いている感じに見えなかったということなんだ。

永山：時間が進んでいるわけですから今やっていること、今回の展示について、当時のことを説明されるよりも、今を聞きたいですね。

平田：基本的に、同じストーリーでしたよね。

藤本：むしろ少し劣化してたのかもしれないね。

永山：今回は、結構ジオメトリーが強かったですよ。

藤本：それは相当悶々としていますね。

永山：だからそういう意味での差がまた、ひしひしと感じたのです。

—— 2017年に、第1回目の「10会議」が発足され、本展のあり方を議論させていただく中で、出展者の選出方法として他薦である推薦枠を追加し、1 他薦・推薦枠、2 自薦・公募枠、3 シード・指名枠との3枠といたしました。また2019年の開催中、GOLD MEDALを獲られた秋吉さんから、出展者世代の方が若手の同世代の存在を多く知っているとのお助言をいただいたことから、今年も出展者の皆様から、それぞれ2-3名のお薦めリストをいただき、これを参考に、皆さんから推薦される方を選出いただきました。来年の10名による選出者の簡単な紹介を五十嵐太郎先生よりお願いいたします。(1987年4月生まれ以降の方が応募可能・2023.3月末日時点で35歳以下)

【2023年推薦】審査委員長：平沼孝啓

01. 五十嵐太郎 ● 福留愛 | iii architects
02. 倉方俊輔 ● 大村高広 | GROUP
03. 芦澤竜一 ● 大野宏 | Studio on_site
04. 五十嵐淳 ● 竹内吉彦 | tデ
06. 永山祐子 ● 久米貴大 | Bangkok Tokyo Architecture
07. 平田晃久 ● 笹田有志 | ULTRA STUDIO
08. 平沼孝啓 ○2023年 審査委員長のため不選出
09. 藤本壮介 ● 小林広美 | studio m!kke
10. 吉村靖孝 ● 小田切駿 + 瀬尾憲司 + 渡辺瑞帆 | ガラージュ

【2021年推薦】審査委員長：吉村靖孝

01. 五十嵐太郎 ● 原田雄次 | 原田雄次建築工芸
02. 倉方俊輔 ● 太田翔 + 武井良祐 | OSTR
03. 芦澤竜一 ● 山口晶 | TEAM クラプトン
04. 五十嵐淳 ● 森恵吾 + 張婕 | ATELIER MOZH
05. 石上純也 ● 岸秀和 | 岸秀和建築設計事務所
06. 谷尻誠 ● 鈴木岳彦 | 鈴木岳彦建築設計事務所
07. 平田晃久 ● 松下晃士 | OFFICE COASTLINE
08. 平沼孝啓 ● 榮家志保 | EIKA studio
09. 藤本壮介 ● 板坂留五 | RUI Architects
10. 吉村靖孝 ○2021年 審査委員長のため不選出

上記の他薦・推薦枠より2-4組、自薦・公募枠より2-4組、
●推薦枠・公募枠による選出数は、当年の審査委員長・選出数による。

【2022年推薦】審査委員長：芦澤竜一

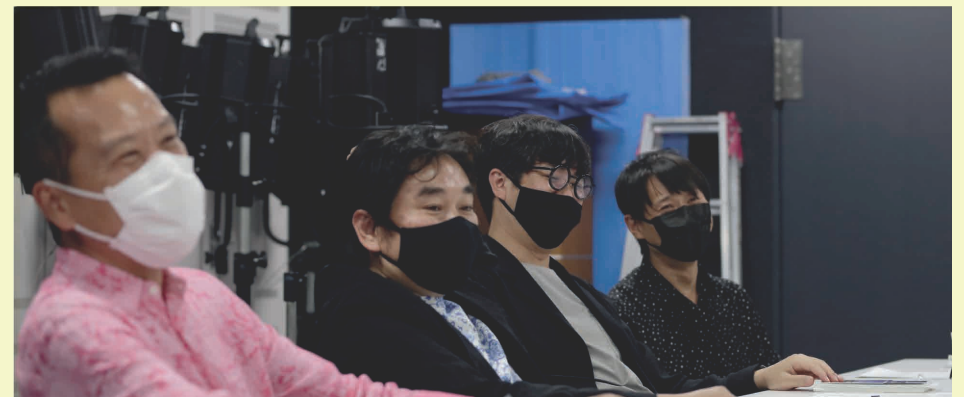
- 佐々木慧 | axonometric
- 石黒泰司 | ambientdesigns
- 2022年 審査委員長のため不選出
- 森恵吾 + 張婕 | ATELIER MOZH
- 不選出
- 不選出
- 西倉美祝 | MACAP
- Aleksandra Kovaleva + 佐藤敬 | KASA
- 杉山由香 | タテモノトカ
- 甲斐貴大 | studio arché

五十嵐太郎：今年の佐々木さんを推薦した時と同じく、毎年見ているせんだいデザインリーグで知った方で、福留さんです。佐々木さんとは違い、福留さんはファイナルの審査に残らなかったのですが、そこからもれた人を評価する仕組みのエスキス塾で、高く評価していました。その後横浜国立大学に通われ、今はユニットで活動をされています。卒業設計では、「窓の宇宙」という詩人の文学館を提案していて、新しい空間の形式を創り出す能力がある人だと思いました。今回のお薦めリストに彼女の名前があるのを見つけ、まだ若いのであまり実績は無いかもしれないけれど、僕としては期待している若手建築家の卵です。

倉方：私は大村高広さんを推薦しました。彼の論考を読んだことがあって、興味深いなと思ってたことと、戦前のモダニズム建築から三岸好太郎アトリエの改修を手掛けているので知っていました。今回のお薦めリストに名前を見つけ、行き着いたつながりを知ってみたいと感じました。建築になる以前のもの論考と、モダニズムのリノベーション。今回の出展の計画がどのようにリンクするのかを非常に楽しみにしています。

芦澤：僕の研究室の人をリストで見つけまして、大野宏さんを推薦します。彼は院生の時にフィリピンの被災地に通って教会やトイレをつくり、今は、地域に入って設計と施工の両方をやって活動しているような人です。推薦者の中に、そういう人が一人入っていても面白いかなと思い推薦しました。

五十嵐淳：リストの中から、各々のインスタグラムを見ていたら、この人、なんだか好きだな、と思って選びました。全然知らない方ですが、竹内吉彦さんです。





永山：久米貴大さんです。プリミティブな素材を使いながら洗練された建築をつくっていて、私は一度、バンコクでお会いしたことがあります。生前、小嶋一浩さんが海外に出ると言っていた世代が多く出た時代があって、寺本さんや佐々木さんなど、その影響から下の世代も外に出ているのが素晴らしいなと思い、海外に出て頑張っている人を応援したいなと思いました。現在はベトナムなどでも活動している様子ですが、特にアジアは、建築と美術に対してなかなか作品評価を得ることが難しい地域で、大変奮闘されているのだらうと思います。

平田：笹田侑志さん。ウェブで見ていると、かなり意識しているドローイングで、誇大妄想みたいなものと、とても小さなスケールが共存する世界観。直観ですが、それが面白くて興味を覚えました。

藤本：最近、万博会場のトイレなど、比較的小さな建物を建てる若手を選んでいたのですが、その中から小林広美さんを選びました。

平田：何をやっていた人？

芦澤：石の柱みたいなものですね。

吉村：僕は、渡辺さん+小田切さん+瀬尾さんの三人組ユニットを推薦しました。建築家の集団とも言い切れない感じで、建築設計と映像作家と演劇、セノグラファーの三人で組んでやっているチームで、作品はあまりないと思いますが、100年かけて劇場を作るプロジェクトや、学生を集めて喜界島建築フィールドワークを開催したり、面白いことをやりたがったりしている人たちです。早

稲田の卒業生で、若干身内ではあるんですけどね。

——— ありがとうございます。それでは、この他薦・推薦枠より2-3組、自薦・公募枠により2-3組、GOLD MEDAL 受賞者と TOYO ITO PRIZE 受賞者のシード枠から2組＝計7組を、来年の審査委員長、平沼先生に選出いただけます。選考の際のお相手（対談）は藤本先生にお願いし、大阪に来られる、応募締切翌日の1/21(土)朝11:00に平沼事務所で行う予定です。どうぞよろしくお願いたします。それではここで、万博の会場プロデューサーを務められ大阪に通われる藤本先生が、吉村先生、そして平田先生らと、本展の過去出展者世代を中心に、若手建築家の皆様へ向けてコンペを開き、広く万博へ関わる建築家の方々と共に、2.5年先の開幕に向かわれておられます。'70より継がれた'25万博の限時的な「建築の博覧会」のような開催に期待を寄せ、本展の誌面を通じてご共有いただけないでしょうか。

藤本：長年開催を続けてきた大阪での取り組みですからね。'70博のときにも建築だけに限らず、アートやグラフィックの分野のたくさんの若い方々が活躍されたとお聞きしています。ここにいる僕たちの世代の皆さんも、もちろんこの万博に関わってくださっていますし、せっかく万博を日本でやるのだから、建築を目指す若い人たちと一緒に世代を超えて盛り上げたいと思っています。僕らは50歳を過ぎ、個人的には子どもも2人目が生まれ、親目線の意識もそろそろ芽生えてきていますし（笑）、当然U-35や建築学生ワークショップ等、AAFの活動にずっと取り組んできたことで、そういう意識が自分の中に生まれてきたのだと思っています。若手の皆さんの取り組みについては、トイレや休憩所、ポップアップステージなどの小さな建物を20個ほど、吉村さんや平田さんにも加わってもらいながら審査し、数日前に中間発表を行いました。とても面白い会になりました。若手の皆さんは割と無鉄砲に進めていて、全然ビビっていないのが特徴です（笑）。どこかで巨大な壁にぶつかりそうな気もしますが、そこまではとにかく「頑張れ〜」と応援をしています。若い建築家たちがこれからの社会を担っていくわけですし、今日もそうでしたが、若い建築家なりの直感で掴んだ新しい世界観みたいなものが僕らにとっても凄く刺激的で、「努めるといっては、こういうことではないかな」と解釈したり、僕たちなりに意味を見つけたりするのも楽しいです。それを来年以降、この先も含めて継続していきたいと思います。

——— 最後になりましたがこれから応募される若手へ、メッセージをいただけないでしょうか。五十嵐淳先生、五十嵐太郎先生、永山先生、最後に来年の審査委員長平沼先生をお願いします。



五十嵐淳：自分が思い描く幻想、共同幻想という言葉が今頃気になっていて、今の時点での自分が自信を持って本当にいいなと思うような幻想を、大声で言えるような応募案をいっぱい見てみたいんです。仮に、響かなくても本気でそれを信じていれば、いつか必ず何かになる可能性があります。もちろん審査委員長に響けば、選出されたこの場で、掘り下げることが叶うでしょう。だからまずは、挑戦から始めてください。

五十嵐太郎：いつも新しい才能に出会えるのを楽しみにしています。今年も2組、ロシアや中国など、国際的なメンバーのユニットが選出されましたが、コロナもだいぶ落ち着いてきましたので、海外を拠点にしている建築家、若手の人にももっと参加してほしいと思います。それからU-35の宣伝が、大阪の街の中で増え、目立っています。なので、建築界だけでなく、一般の社会でも強い存在感をもつようになったので、参加することできっといろんなチャンスが増えると思います。そういう効果があることも知っていただいて、ぜひ応募してください。

永山：「未完成なものを出して、議論に乗せたい」と言っていたのを聞いて、「凄いいい会だな」と、しみじみ思いました。どうしても完成形を見がちだけれど、この会の良さは、未完成なものを一回議論してみたいなと思って持ち込める土壌とそれが許容されている包容力がある。これだけのメンバーが集まるので当然ですが、「自分が信じているものを誰かにぶつけてみたい、テーブルの上に乗せたい」という挑戦的なものも出していい場なんだな、ということですね。来年も楽しみにしています。

平沼：この10人の持ち回りで、10年ぶりに回ってくる審査員の当番。今は自薦で挑戦をしてくる公募枠、そして先ほど皆さんに挙げていただいた推薦枠8組、そして今年のGOLD MEDALと来週

の伊東豊雄賞のシード枠2名を含め、皆さんと果敢に議論できる猛者たちをがんばって選出したいと思います。例年通りですと50組を超える方たちが応募されますから、応募資料ではなかなか読み取れないことも何とか読み取るように努めたいですし、まだ誰にも気づかれていない価値を見つけたい。探検者のように発見し、価値の位置づけができるよう目指していきますので、推薦の他にも意欲を持っている若手の方が周りにいたら、応募するよう、どうか背中を推してあげてくださいね。とはいえ、結果としてほとんどを落としてしまう嫌われ者にならなければいけません（笑）。

一同：あはは（笑）。

平沼：審査員とは得てして、嫌われ者になる宿命を背負った役割です。あらゆる場で輩となる方々が担われ、僕たちの多くもその挑戦者となってきた分、落とされた痛みも理解されない苦悩も、相当思い返せます。しかし自分が選ぶ立場となり、バトンを一度も落とさず継いだ結果が「進歩」と言えるのかもしれない。多数決でなく一人で選出する重責を担って選ぶことも記録となります。今年のGOLD MEDALの佐々木さん、伊東豊雄賞のおそらく凄い2組がシード枠で出展されると5組の選出ということになります。倍率が10倍となる狭き門になりますので、審査基準は、「これからの時代の『あらたな批評性ある建築』を発見したい」と公表しておきましょう。さあ、皆さんビールをお待たせしました！これから出展者と共に、打ち上げに参りましょう！（笑）。

一同：わあい！おつかれさまでしたー（笑）。

——— 本日は、展覧会会場での視察にはじまり、4時間余りのシンポジウムの後、この10会議の場にご参加いただき、貴重なご意見をいただけて感謝しています。最後となりましたが、来年のシンポジウムは、2023年10月21日（土）と決定しておりますので、皆さま、14年目の開催もどうかよろしく願いいたします。また本年の開催の良いことも、良くないことも含めて、話題にいただければ、とてもうれしく思います。どうかこの後、10日間の会期中もぜひSNS等を通じて、応援をいただけますようお願い申し上げます。皆様、大きな拍手で閉会とさせていただきます。本日は、誠にありがとうございました！

2022年10月1日

大阪・梅田 グランフロント大阪 北館4階 ナレッジシアター・控室